日本医史学雑誌　第65巻第4号（2019）　458–481

有馬玄哲に始まる医家有馬家の系譜について

今井　　秀

今井整形外科

受付：平成30年8月9日／受理：令和元年7月24日

要旨：医家有馬家は江戸末期まで続いた家系で，彼らは丹波福知山藩ならびに紀州和歌山藩の典薬となり仕えた．有馬玄哲が医家有馬家の始祖で，玄哲は曲直瀬玄朔に医学を学び法印に叙され，後水尾天皇の典薬となった英傑の医家であった．

玄哲の長男・良竹は有馬家を相続し幕府医官となったが，やがて弟の凉及に家督を譲り，凉及はのちに徳川頼宣侯（諡南龍）に仕えた．その後良竹の末裔は代々福知山藩主朽木侯に仕え，また凉及の末裔は紀州藩主徳川侯に仕えた．なかでも凉及は何事にも束縛されない自由奔放な人であったが，我が国「古方派」の嚆矢と見做されるほどの傑出した医家であった．

他方，福知山藩医の有馬凉築は朽木昌綱侯の計らいで養子の文仲を大槻玄沢に弟子入りさせ，文仲は西洋の文物を解説した『蘭説弁惑』を著した．

このように有馬家は，秀逸な医家を多く輩出した名家であった．

キーワード：有馬玄哲，有馬凉及，有馬良竹，有馬文仲，朽木昌綱

1. はじめに

有馬家は，江戸時代に福知山藩主朽木家と紀州藩主徳川家の典薬として，幕末まで連綿と続いた家系である．その医家の始祖が有馬玄哲である．

紀州藩典薬有馬家（以後紀州有馬家と略す）の系譜（図1）は，佐伯理一郎氏の「有馬凉及及有馬家に就て」[1]や『有馬良橘傳』附録[2]ならびに白嵜顕成（しらさきけんじょう）氏の『くろ谷金戒光明寺に眠る人びと』[3]と『藤村庸軒（ようけん）をめぐる人々』[4]に紀州有馬家が所有する「有馬家系図」（巻子本）と紀州徳川家に差し出された「有馬家系譜」が掲載され，紀州有馬家について詳細に報告されている．

しかし，福知山藩典薬有馬家（以後福知山有馬家と略す）の系譜については，過去に報告を見ない．今回縁あって福知山有馬家十二代の有馬良宏氏が所有する「福知山藩有馬家系図」（巻子本）と「丹波福知山藩典薬有馬家略譜」（別名；「福知山有馬家略譜」）を閲覧することができた．

「福知山藩有馬家系図」（巻子本）は二種類ある．一つは幅14.5 cm長さ70 cmの和紙に松原掃部介定久から福知山有馬家三代良益の孫鍋蔵（のちの文仲）までの系譜が毛筆で書かれ〔（図2，9）上段，（図6，7，8）右側〕，もう一つは幅14.5 cm長さ135 cmの和紙に松原掃部介定久から福知山有馬家八代龍仙までの系譜が毛筆で書かれている〔（図2，9）下段，（図6，7，8）左側〕．

前者の鍋蔵までの系図には，鍋蔵について没年月日や事績の記載等が全くない（図9上段）．このことから，私はこの系図の作成者は鍋蔵（後の有馬文仲）自身ではないかと推測している．しかし，『蘭説弁惑』に記される文仲の筆跡とは明らかに異なるため，筆者は別の人物であると思われる．また，後者の系図は，前者の鍋蔵までの系図を基に，最後の福知山藩典薬であった八代龍仙が補足して作製したものと推測する．なぜなら，前者の系図と同様に龍仙自身の没年や事績等の記載が全くないからである．

また，（図9）上段にある両者の系図を比較すると，前者は良益の姉妹が四人，後者は六人と異

「有馬家系図」

有馬家系圖

次には有馬家所有の系圖（巻物）を寫すべし

攝津國有馬郡三田藩公英城主

高祖父　松原右衛門　戦死

嫡子　左近　同行

右衛門妻

萬里小路大納言殿　息　女

爲典藥頭道三門人而勤醫　二男　有　馬　玄　哲法印

卽延壽院玄朔先生門人也

後水尾院樣ヨリ御製ヲ戴ク養老ト云題ニテ

老樂の養ふ道を人もしれ水無月までも殘るこふりを

號　龍　壽　院

爲三井寺沙門　三男　巳　三　郎

巳七月二十五日逝去法名亮壽院前法印萬空大居士

同人妻（酢屋吉右衛門妹）正月二日死去法名清順信女

「有馬家系譜」

次に紀州家に差出されたる系譜を掲ぐべし

系　譜

清　和　源氏　有　馬　氏

家紋左リ三ツ巴
替紋丸ニ二ツ引
幕紋牡丹唐獅子

一元祖　本國攝津
生國攝津　松　原　右　近　太　夫　貞　利　長　男

松原右衛門大輔實名不知二男

有　馬　玄　哲實名不知

松原右近太夫事攝津國三田邊道場河原と申處松原古城ト申城跡御座か、右近太夫儀右之所城主之由申傳か、天正八庚辰年三月十五日戰死仕右衛門大輔并弟松原山城守、松原外記右衛門大輔長男松原左近右父子兄弟共落城之節戰死仕か

右衛門大輔三男松原巳之助爲三井寺皆春弟子沙門申か

一玄哲儀天正之頃落城之後同國有馬住居其後京都へ罷越今大路道三之門人ニ相成醫業執行仕又其後東都へ罷越赤坂今井谷ト申處ニ住居仕又其後京都へ罷越、

禁裏之御醫師ニ被召出敘位法印ニ進ミ申か、右之宣示于今所持仕か玄哲儀元來松原氏ニテ御座か處

後水尾帝之御宇勅旨ニテ有馬氏ヲ被下置龍壽院法印玄哲并惟

故法眼涼及被爲召罷出御診等被仰付御藥差上拜領物仕か一

寛文五乙巳年七月二十五日病死仕か于時八十五歳

図1　紀州藩典薬有馬家の系譜
佐伯理一郎著「有馬涼及及有馬家に就て」より転載

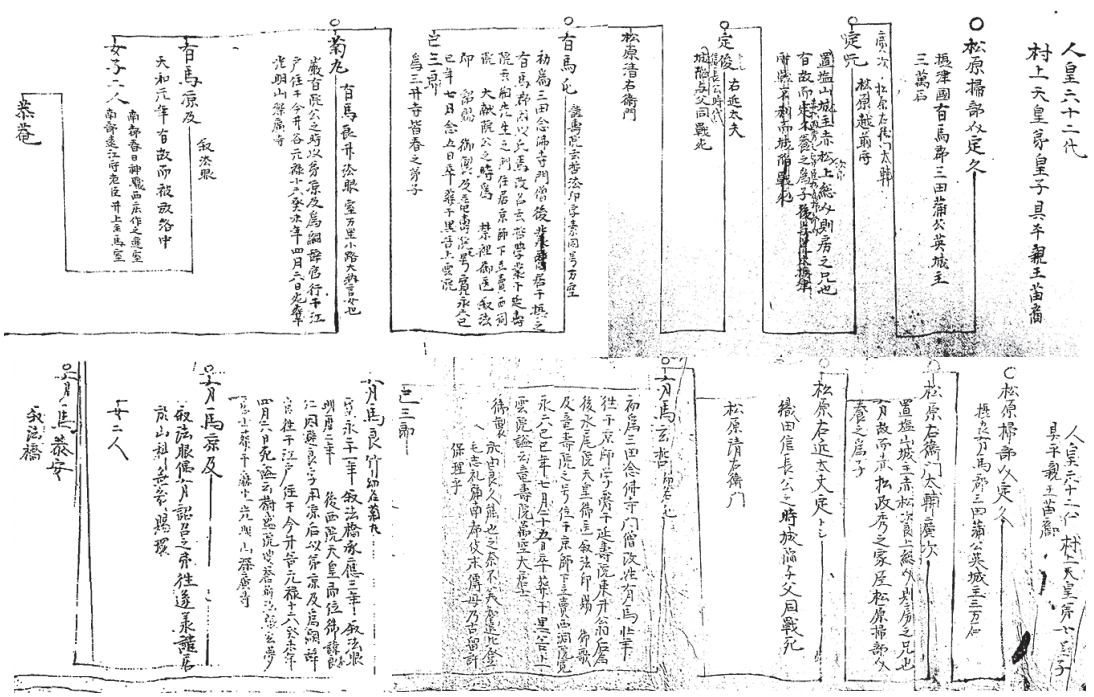


図2　「福知山藩有馬家系図」（巻子本）

なる．後者の六人の姉妹の一人・尼子知清院は前者では良益の子となっており，若干の違いはある．しかし，系図全般では，他の部分の記載内容はほぼ一致している．

また，「丹波福知山藩典薬有馬家略譜」（図3）は，福知山の郷土史家である山口加米之助（雅号・竹毛）氏（『丹波人物志』[5] 参照）が，八代龍仙までの系譜が書かれた「福知山藩有馬家系図」

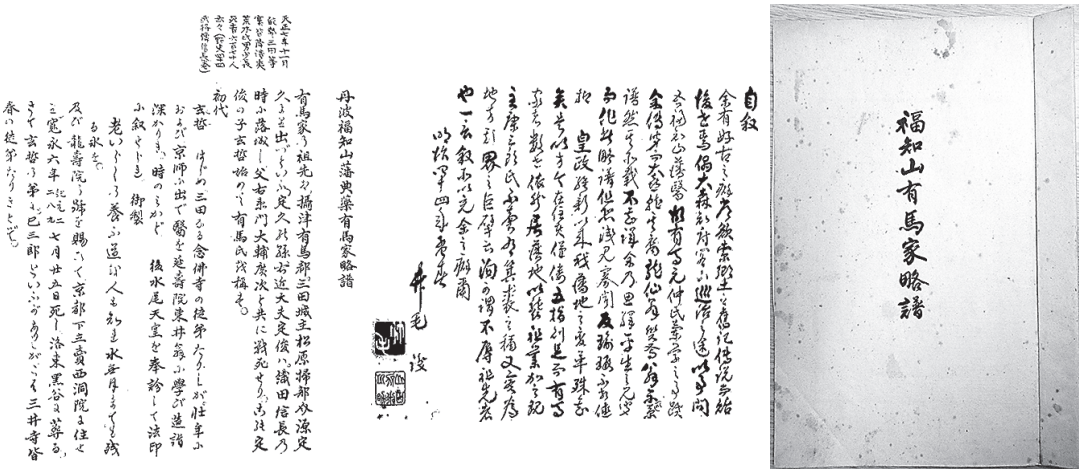


図3　「丹波福知山藩典薬有馬家略譜」

をもとに，箕裘を継いだ九代康三郎長男の良三までの福知山有馬家の系譜を明治四十四（1911）年に編纂したものである．多くの歴史的資料を参考にして，それらを熟読玩味したうえで書き上げた力作である．

（註）「丹波福知山藩典薬有馬家略譜」は，医家有馬家初代を玄哲，二代を良竹，三代を涼及としている．しかし，今回の報告は医家有馬家の初代は玄哲で同じであるが，福知山有馬家と紀州有馬家を個別に扱ったため，福知山有馬家初代を良竹，紀州有馬家初代を涼及とした．したがって，福知山有馬家二代涼竹はこの「略譜」では四代，十代良三は十二代と記載され，良三まで二代の差異が生じているのでご注意いただきたい．

2. 本研究の目的

今回，新出の福知山有馬家の系譜と既出の紀州有馬家の系譜を照合して相違点を明らかにし，医家有馬家でもとりわけ福知山有馬家の事績について論考する．また，藩主朽木侯の治政との関係にも言及する．さらに古方派の嚆矢とみなされる傑出した医家である紀州有馬家初代涼及についても考察する．

3. 福知山有馬家の概略

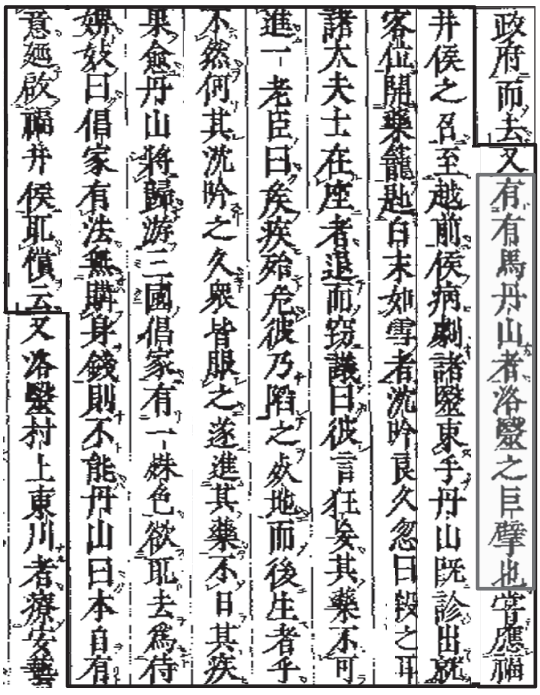
医家有馬家の始祖は曲直瀬玄朔門下の有馬玄哲で，京で後水尾天皇の御医を務めた名医の誉れ高い人物である．玄哲長男の良竹が家督を継いだが，やがて弟の涼及に家督を譲り，自らは離職し江戸に出て，幕府医官となり赤坂今井谷に住んだ．その後，良竹次男の涼竹は江戸に数年住んだが，福知山城主朽木稙治侯に随従し福知山に移住した．福知山有馬家は二代涼竹以降，子孫は八代龍仙まで代々福知山藩主朽木侯の典薬としておよそ120年余り仕えた．特に四代涼築の時，蘭癖学者大名として有名な福知山朽木家八代藩主の昌綱は大槻玄沢を支援し，藩医の文仲（涼築の養子）を玄沢の一番弟子として送り込み，自らも西洋文化を盛んに取り入れ多くの著書を遺している．

4. 紀州有馬家の概略

紀州有馬家は，玄哲の次男涼及が兄の良竹より宮廷医の家督を継ぎ，のちに紀州徳川藩祖の南龍公（家康公の10男・頼宜）に仕え初代紀州藩医となる．涼及の長男恭安が家督を継ぎ，ひきつづき京に居住した．その後三代涼及元函（涼及の四男）の時から紀州和歌山に移住し，七代の元函広徳まで代々紀州藩主徳川侯に仕えた．すなわち紀州有馬家は初代涼及からおよそ240年間紀州徳川侯の典薬として仕えたのである．

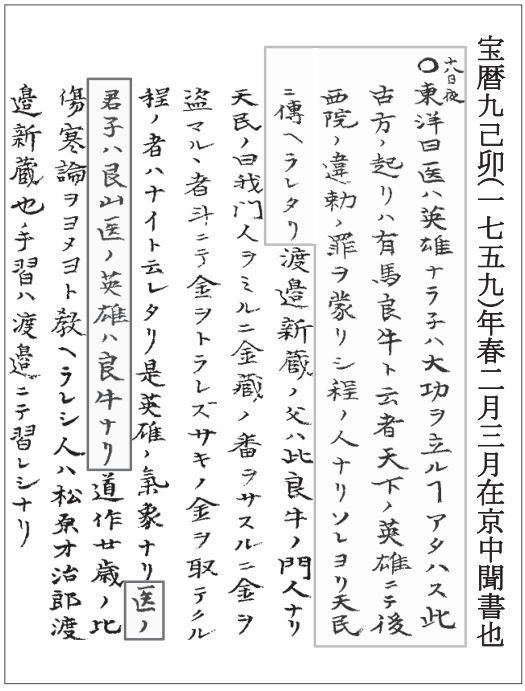
なかでも，涼及（存庵，臥雲，あるいは丹山と号す）は永富独嘯庵が『漫游雑記』で「洛医の巨擘」，山脇東洋が合田求吾書『医道聞書』で「医の英雄」（図4）と評するほど医術に長け，我が国「古方派」の嚆矢と見做される国手であった．

永富独嘯庵著『漫游雑記』


政府而去又有有馬丹山者洛醫之巨擘也嘗應福
井侯之召至越前侯病劇諸醫束手丹山既診出就
客位開藥籠匙白末如雪者沈吟良久忽曰投之耳
諸大夫士在座者退而竊議曰彼言狂妄其藥不可
進一老臣曰矣疾殆危彼乃陷之死地而後生者乎
不然何其沈吟之久衆皆服之遂進其藥不日其疾
果愈丹山將歸游二國倡家有一絳色欲耶去爲待
舟鼓曰倡家有法無賸身錢則不能丹山曰本自有
意延啟福井侯耶償云又洛醫村上東川者療安藝

『歴代漢方医書大成』

合田求吾書『医道聞書』


宝暦九己卯(一七五九)年春二月三月在京中聞書也
○六日夜東洋曰医ハ英雄ナラ子ハ大功ヲ立ルヿアタハス此
古方ノ起リハ有馬良牛ト云者天下ノ英雄ニテ後
西院ノ違勅ノ罪ヲ蒙リシ程ノ人ナリソレヨリ天民
ニ傳ヘラレタリ渡邉新藏ノ父ハ此良牛ノ門人ナリ
天民ノ曰我門人ヲミルニ金藏ノ番ヲサスルニ金ヲ
盗マルヽ者ナニテ金ヲトラレズサキノ金ヲ取テクル
程ノ者ハナイト云レタリ是英雄ノ氣象ナリ医ノ
君子ハ艮山医ノ英雄ハ良牛ナリ道作廿歳ノ比
傷寒論ヲヨメヨト教ヘラレシ人ハ松原才治郎渡
邉新藏也手習ハ渡邉ニテ習レシナリ

公益財団法人鎌田共済会 郷土博物館所蔵

図4　有馬凉及を紹介した二書

一方『近世畸人傳』に「碁に夢中になり後西天皇に京を追われた話」や「寝てみる桜の話」，さらに茶人としても「凉及井戸茶碗を所持した話」など，“其の狂態伝ふる所の笑話多し”と評されるほど何事にも束縛されない自由奔放な人でもあった．

また，三代の凉及元函は父に似て学才に恵まれ，物欲を去り衣服を飾らない学者肌の人であったから，奇行と見られる逸話も多い．紀州藩儒伊藤蘭嵎[6]の推挙で紀州に赴き，典薬となった．そして其の家数世の説を大成して，「傷寒論」の読解書『傷寒論神解』を著した．紀州有馬家は凉及を始めとして代々「傷寒論」を学んでいたことがわかる．

5. 有馬家の祖先（図5）

有馬家の祖先は，人皇*六十二代村上天皇第七皇子具平親王の苗裔摂津有馬郡三田の蒲公英（松原）城主（三万石）であった松原掃部介源定久が元祖である．子の松原右衛門大輔廣次と孫の松原右近太夫定利は天正八（1580）年3月15日織田信長の時に落城し，共に戦死した．

（*人皇とは，神武天皇を初代とする代々の天皇のこと．）

定久の曾孫で定利の次男・玄哲が医家有馬家の始祖となり，玄哲・長男の良竹は赤坂今井谷に住み幕府医官を務め，その後子孫は代々福知山藩主朽木侯に仕えた．また，次男の凉及は元和五（1619）年紀州藩初代藩主となった徳川頼宜侯に仕え紀州有馬家初代となり，その後代々維新まで紀州徳川藩に仕えた．頼宜は家康の10男で諡が南龍，八代将軍吉宗の祖父に当たる．

6. 医家有馬家初代 有馬玄哲　1581–1665

玄哲（初名屯，字素同，号万空）は天正九（1581）年摂州有馬に生まれたが，その前年に蒲公英城が落城したため，三田念仏寺の門僧となり，有馬に住んだ．その後京に上り曲直瀬玄朔（1549–1632）の門人となり医業を学び，医家有馬家の始祖となった．しかし，その後江戸へ罷越し赤坂今井谷に住んだ．

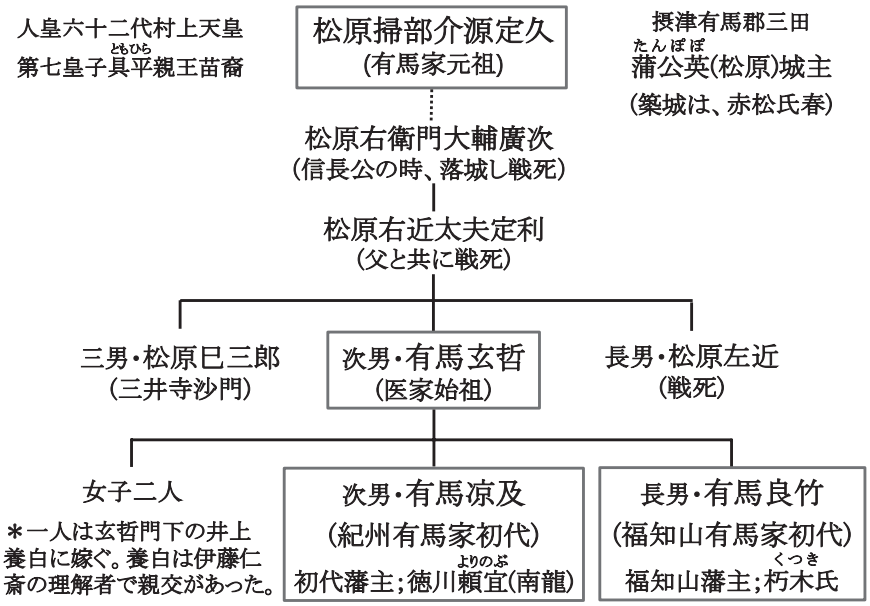


図5　「有馬家の祖先」

承応二（1653）年73歳の時，再び京に戻り禁裏医となる．やがて後水尾天皇（1596–1680）の御医となり法印に叙され，京都下立売西洞院に住んだ．また，後水尾天皇から松原の姓を改め有馬氏を称することを許され，龍寿院の号を賜り，「養老」の題で「老楽の養ふ道を人も知れ水無月までも残るこふりを」の御製を戴いた．

紀州徳川家に差し出された「有馬家系譜」（図1）には，玄哲は「明暦元乙未年七月　公儀之御召にて江戸表え罷越滞留え内　南竜院様東都に被為在候節，法印玄哲並倅故法眼凉及被為召，罷出御診等被　仰付御薬差上拝領物仕候」[7] とある．この一文は白嵜顕成氏の二書と『有馬良橘伝』にはあるが，佐伯理一郎氏の「有馬凉及及有馬家に就て」には載っていない．

すなわち明暦元（1655）年七月玄哲75歳の時，徳川幕府の求めで次男凉及を伴い江戸に下り，将軍家綱（1641–1680）を治療した．折柄参府中の紀州南龍公（1602–1671）がご病気になり道作（山脇玄心，1594–1678）が請われたが，後水尾上皇は，「朕は一日たりと道作無かるべからず．道作在らざれば朕心安からず」[8] と述べられたため，道作に代わり玄哲が南龍公を治療した．紀州徳川侯との関係はこの時から始まったという．

玄哲の没年は，福知山有馬家の「系図」と「略譜」のどちらにも「寛永六己巳（1629）年七月二十五日卒葬于黒谷」（図1）とあるが，紀州藩に差し出された「有馬家系譜」[9] と墓碑銘[10] には，「寛文五乙巳（1665）年七月二十五日病死仕候于時八十五歳」（図1）とあり異なる．仮に没年が寛永六年とすれば，玄哲は49歳で亡くなった計算になり，75歳時の南龍公の治療も起り得ない．また，次の『隔蓂記』に書かれた玄哲に関する記事も偽りになる．したがって，玄哲の没年は紀州有馬家の系譜と墓碑銘にある寛文五年であると判断した．

玄哲は風流を愛し，多くの茶会や香の会にも参席し，鳳林承章[11] や千宗旦，小堀遠州，金森宗和らと親しくしていた．白嵜顕成氏によれば，『隔蓂記』には寛永十二（1635）年から寛文四（1664）年の間に，玄哲に関する記事が33回載るという．夏には香薷散（暑気払いの薬）や年末には屠蘇散を献上した記録が多い．特に寛文四（1664）年四月廿日の記事は，京火事が油小路丸田（太）町二町下有馬玄哲法眼医者の家から出たというものである[12]．

また，玄哲の妻は酢屋吉右衛門の娘松山伊都である．正月二日死去．法名は清順信女で，黒谷に葬られている（図1）．

7. 玄哲の同門 山脇玄心（げんしん）　1594–1678

山脇玄心は文禄三（1594）年の生まれで，岐阜の三宅宗理の息子．通称は道作．玄心は諡で，甥の山脇玄脩（げんしゅう）を養子とした．玄脩の養子が山脇東洋で，東洋は玄心の孫にあたる．

玄心は15歳の時曲直瀬玄朔に学び，17歳で福知山藩初代藩主有馬豊氏（とようじ）（1569–1642）に初めて仕えた．元和（げんな）六（1620）年27歳の時，官医曲直瀬玄由（げんゆう）の薦めで朝廷の禁裏医となり，後水尾上皇・東福門院の薬調進にあたり月俸70口，院御所からも30口を受けた．そののち山脇家は京都に居住し代々禁裏医を務めた．

玄心は寛永十四（1637）年法眼に，寛永二十（1643）年50歳の時法印に叙され，後水尾上皇から養寿院の号を授かり，頭巾および鳩の杖を賜った．寛文六（1666）年関東から月俸30口を受ける．

勅命により，正保五（1648）年『勅撰養寿録』を著し，さらに『原病式集解』『医方捷径（しょうけい）』を撰した．延宝六（1678）年病没．八十五歳[13]．

玄心と玄哲はともに曲直瀬玄朔に学び，後水尾上皇の典薬を務めた．また二人とも85歳と長寿であった．玄心は若くして初めて福知山藩初代藩主有馬豊氏（とようじ）の典薬となったが，のちに福知山藩主となった朽木氏の典薬は玄哲の子孫が幕末まで務めた．さらに福知山有馬家四代の有馬凉築は，玄心孫の山脇東洋の門弟であった（図9下段）．このように玄心と玄哲には共通点が多く，また山脇家と有馬家は福知山藩と深く係わり，両家は交流があったと思われる．

8. 福知山有馬家系譜に書かれる 有馬凉及 1633–1701（図6）

福知山有馬家の「系図」には，凉及は法眼に叙され天和元（1681）年霊元天皇の御宇（ぎょう）召されるも往かず，譴（とが）を承り山科に逐（お）われたことが記されている．

また「略譜」には，「凉及（一に了及につくる）は即ち良竹の弟にして（紀州藩有馬家の初代はこの人か），名は存庵（そんあん）．凉及はその號といふ．（又臥雲（うん）とも号せしとぞ）．性宏達（こうだつ）不羈（ふき）にして，醫術に精（くわ）し．時の天子（後水尾天皇とあれども年代合はず．恐らくは東山天皇ならむ）不豫，日を経れど

紀州藩「有馬家系図」(左)
「有馬家系譜」(右)
佐伯理一郎著
「有馬凉及及有馬家に就て」より転載

「丹波福知山藩典薬有馬家略譜」

「福知山藩有馬家系図」
(巻子本)

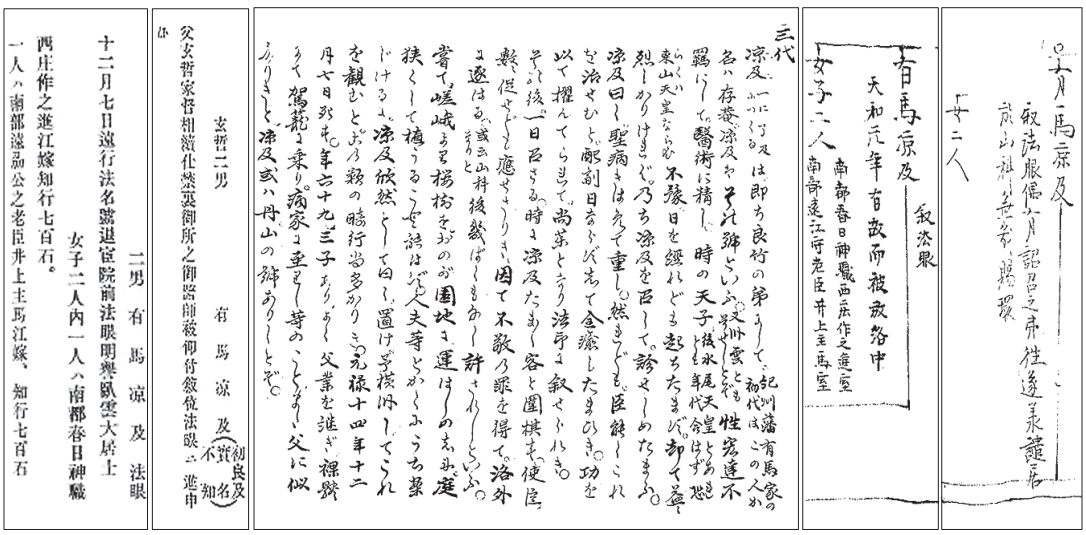


図6　紀州有馬家初代・有馬凉及

も起ちたまわず．却て益々烈しかりければ，乃ち涼及を召して，診せしめたまふ．涼及曰く，聖病きはめて重し．然れども，臣能くこれを治せむと．配剤日ならずして，全癒したまひき．功を以て擢んでられて，尚薬となり法印（法眼の誤り）に叙せられき．その後一日召さる時に涼及たまたま客と囲碁す．使臣数々促せども応せざりき．因て不敬の罪を得て，洛外に逐わる（或云山科なりと）．後幾許もなく許されしといふ．嘗て嵯峨より里桜の樹をおのが園地まで運ばしめしに，庭狭くして植うること能はず．人夫等とかくにうち案じけるに，涼及欣然として曰く，“置け．予横臥してこれを観む”と．この類の畸行尚多かりき．元禄十四（1701）年十二月七日死す．年六十九．三子あり．よく父業を継ぎ，裸體にて駕籠に乗り病家に至りし等のこと，また父に似たりきと．涼及或は丹山の號ありしとぞ」とあり，『近世畸人傳』にも載る涼及の狂態が紹介されている．

9. 医家有馬家と儒家伊藤家との関係

「福知山藩有馬家系図」（図2上段）と紀州藩「有馬家系図」（図6）に，玄哲の二人の娘の名があり，その内の一人は「南都春日神職西庄作之進室」で，もう一人は「南部遠江守老臣井上主馬室」である．井上主馬は玄哲の弟子で娘婿の井上養白のことである．養白は伊藤仁斎（1627–1676）の初期から唯一の理解者として親交があった人物である．

伊藤仁斎は28，9歳のころから羸疾（神経症）にかかり隠棲し，おおよそ10年間は外出せず，近所の者も顔すら知らなかった[14]．寛文二（1662）年5月仁斎が自宅に戻り，塾「古義堂」を開き世に出てからは，涼及の義弟・井上養白との縁で多くの医師の子息が入門し，古方派を形成する源流になったという．

また，『近世畸人傳』には「有馬氏涼及の名，父子兄弟に及ぼして四世医を業とす．伊藤氏と四世の交りあるよし．蘭嵎の傷寒論神解の序に書けるは，仁斎先生の考より東涯，蘭嵎兄弟を経たるなるべし．世々国手の称ありて世々不拘也．其の狂態伝ふる所の笑話多し．初代涼及，臥雲と号し，又存庵といふ」とある．すなわち伊藤家の始祖である仁斎と長男東涯，五男蘭嵎と，紀州有馬家初代涼及と父の玄哲，長男恭安（二代）と四男元函（三代）さらに義弟養白とが親交があったことを物語っている．

10. 古方派医家の有馬涼及と古方派の系統

『近世畸人傳』には「後水尾院特に徴して御医とし，階法印（法眼の間違い）を賜ふ．御療の故事は，衆医評を経て後御薬を奉るを，一時帝御悩甚しき時，翁胗し奉りて曰く，“我よく治し奉らん．然れども衆議を経るとならば能はず”と．止事を得ず翁が意に任するに，やがて調製し手づから（自らの手で）煎じて奉るに，瀉下して後，御悩速かに快復ましましける．これ承気湯を奉れば，もし衆医にはからんには必ず肯ざることをおもひけるとぞ」とある．

すなわち涼及は後水尾天皇が重病の時，衆議を経ずに大承気湯を処方し，瀉下してたちどころに回復させた．大承気湯は，『傷寒論』に収載される薬であるため，涼及は古方派の嚆矢と位置づけられたと考えられる．

さらに，合田求吾の『医道聞書』（図3）には，山脇東洋の言として「此の古方の起りは有馬良牛（涼及）と云者天下の英雄にて，後西院の違勅の罪を蒙りし程の人なり．それより天民に伝へられたり」とあり，有馬涼及は古方派の嚆矢で並河天民の医学の師匠であったことがわかる．その後に「医の君子は艮山医の英雄は良牛（涼及）なり．道作（山脇東洋）廿歳の比傷寒論を読め読めと教へられし人は松原才治郎（松原一閑斎）渡邊新蔵（渡邊毅）也．手習は渡邊にて習れしなり」とある．

すなわち東洋は並河天民門下の松原一閑斎や渡邊毅に師事していたことがわかる．東洋が云う古方派の系統は，有馬涼及→並河天民→松原一閑斎，渡邊毅→山脇東洋という師弟関係になる．また，『焦窓雑話』四篇には「松原才治郎（一閑斎）と云いしは東洞老人及び東洋などの師也」と和田東郭は述べている．吉益東洞は東洋の庇護を受けて大成した古方派の医家であるが，当時東洋とともに松原一閑斎を講主として「傷寒論」を学んで

いた．また「医の君子」と東洋に評された後藤艮山は東洋の師であり，艮山と東洞の二人はもちろん古方派の大家である．

並河天民（1679–1718）は13歳で伊藤仁斎に師事したが，仁斎没後の古義堂は東涯師事と天民師事とに二分された．天民は師説を批判して儒にして医を兼ねることを良しとしたので，医家の弟子の多くは天民に就いたという．その後香川修徳（1683–1755）が18歳で上京し，古医方の大家後藤艮山に師事して医学を修めるかたわら，師の勧めに従って仁斎に入門して5年間学んだ．「医の根本は聖道（聖賢の道）にあり，聖道と医術は基本を一にす」として，自らを一本堂と号し「傷寒論」の医説に立ち返ることを唱えた．

また涼及と仁斎は年も近く親しい関係にあった．しかし，儒学を仁斎に医術を涼及に学んだ並河天民は，仁斎の儒学思想（古学）の影響を受け，また宋代儒者の煩雑な注釈により聖賢の道が誤られ，古方が歪曲されているので「傷寒論」に立ち返るべく，医術を名古屋玄医からも学んだと思われる．松岡尚則氏らはその他にも摂津吹田の鳥山見庵や張子和の『儒門事親』（1711年刊）を和刻した渡辺元安らが涼及と仁斎の二人に学んだと述べている[15]．

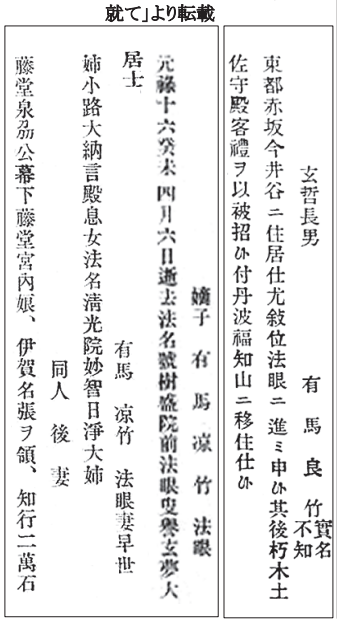
11．福知山有馬家初代・有馬良竹 ？–1703（図7）

良竹は玄哲の長男で，幼名は菊丸．承応三（1654）年法眼に進み，明暦二（1656）年後西天皇即位の際，諱良仁（ながひと）の良の字を避け涼竹と改めた．その後弟涼及を嗣とし，自らは離職し江都に出で幕府医官として赤坂今井谷に住んだ．元禄十六癸未（1703）年四月六日死．諡（おくりな）して樹盛院叟誉前法眼玄夢居士と云う．麻布（光明山）深廣寺に葬られた．

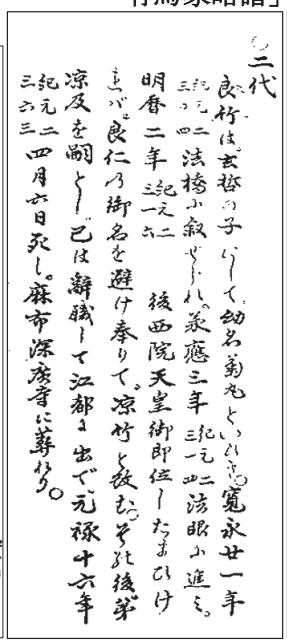
現在深廣寺に初代良竹の墓はなく，遺骨は福知山善行寺（ぜんぎょうじ）北岡墓地に改葬されたと思われる（図17）．これは良竹墓碑の左側面に，「元禄十六癸未年四月六日」と，良竹の没年月日が刻まれていることによる（図18）．

佐伯理一郎氏は紀州有馬家の「系図」と「系譜」より考察するに，“良竹は玄哲の長男にして徳川

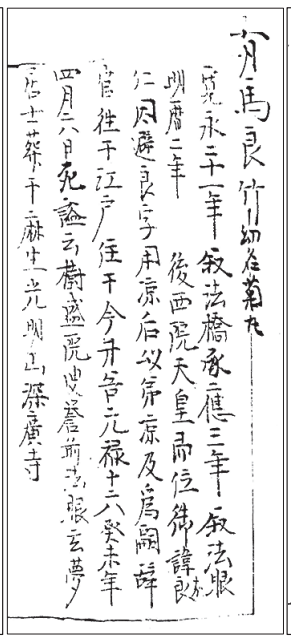
紀州藩「有馬家系図」(左)
「有馬家系譜」(右)
佐伯理一郎著「有馬涼及及有馬家に就て」より転載


玄哲長男　有馬良竹寶名不知
東都赤坂今井谷ニ住居仕尤叙位法眼ニ進ミ申ハ其後朽木土佐守殿客禮ヲ以被招ハ付丹波福知山ニ移住仕ハ
嫡子　有馬涼竹　法眼
元禄十六癸未　四月六日逝去法名號樹盛院前法眼叟誉玄夢大居士
姉小路大納言殿息女法名清光院妙智日淨大姉
同人　後妻
藤堂泉劔公幕下藤堂宮内娘、伊賀名張ヲ領、知行二萬石

「丹波福知山藩典薬
有馬家略譜」


二代
良竹は玄哲の子にして、幼名菊丸といひき。寛永廿一年
法橋ハ叙せられ、承應三年法眼ハ進ミ。
明暦二年　後西院天皇御即位ニ付、諱一字ハ
良仁ノ御名を避け奉りて、涼竹と改む。其後家
涼及を嗣とし、己は辭職して江都ニ出で元禄十六年
四月六日死し、麻布深廣寺に葬る。

「福知山藩有馬家系図」(巻子本)


有馬良竹　幼名菊丸
寛永廿一年　叙法橋承應三年　叙法眼
明暦二年　後西院天皇即位御諱良
仁因避良字用涼名以弟涼及爲嗣辭
官往于江戸住于今井谷元禄十六癸未年
四月六日死謚云樹盛院叟誉前法眼玄夢
居士葬于麻生光明山深廣寺

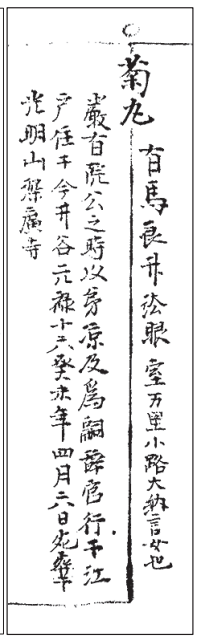

菊丸　有馬良竹法眼　室万里小路大納言女也
叙首院公之時以弟涼及爲嗣辭官行于江
戸住于今井谷元禄十六癸未年四月六日死葬
光明山深廣寺

図7　福知山有馬家初代・有馬良竹

幕府の医官となり江戸に住し法眼に迄進む，後丹波福知山藩医となり子孫代々其跡を継ぎ遂に維新の時代に至る”と述べている[16]．また『有馬良橘伝』（3頁）や白嵜顕成氏も同様に“良竹は後に福知山藩朽木侯に仕えた”としている．これは紀州藩に差し出された「有馬家系譜」（図7）に「東都赤坂今井谷に住居仕り候．尤叙位法眼に進み申し候．其の後朽木土佐守殿客禮を以て招かれ候に付丹州福知山に住居を移し仕り候」と書かれているためであると思われる．

福知山藩朽木家は，初代藩主の稙昌（治世；1669–1708）が伊予守で，四代藩主は稙昌の次男・稙治（治世；1726–1728）が土佐守である．

したがって“その後朽木土佐守殿客礼を以て招かれ，福知山に住居を移した”のは，良竹の倅二代涼竹である．なぜなら，朽木土佐守稙治侯の治世は1726年から1728年で，初代良竹は1703年にはすでに亡くなっているため，稙治侯に仕えることはない．

福知山有馬家の「系図」と「略譜」（図8）にも，その後，二代涼竹が家督をつぎ，“江戸に数年住み，諸侯召せども敢えて仕えず．たまたま福知山城主朽木稙治侯は深く涼竹を信じ，享保十一（1726）年自ら願い出て福知山に随従し移住した”とあるので，二代涼竹の代で福知山に住居を移したことは，疑う余地がない．

また，紀州有馬家の「有馬家系譜」には，初代良竹は“玄哲長男　有馬良竹　実名不知”（図7）とあり，また二代涼竹は“良竹長男（二男が正しい）　有馬良竹　実名不知”（図8）と書かれており，初代・二代とも有馬良竹としている．したがって紀州有馬家は，初代良竹と二代涼竹を混同したものと考えられる．

福知山有馬家の「系図」や「略譜」（図7）に，“良竹は江戸赤坂今井谷に住み幕府医官となり，江戸で亡くなり麻布深廣寺に葬られた”と書かれる通り，初代良竹は江戸で一生を終えた．したがって，二代涼竹が福知山に移住した有馬家の初代ということになる．

今回敢えて玄哲長男の良竹を福知山有馬家初代としたのは，二代涼竹が良竹の血統を継ぐ後継者であるため，玄哲次男の涼及を紀州有馬家初代としたことに対比して扱ったためである．

良竹の妻については紀州藩の「系図」（図7）に，先妻は姉小路大納言の息女で早世．また後妻は藤堂泉州公幕下藤堂宮内（伊賀名張を領，知行二萬石）の娘と書かれている．先妻は福知山善行寺北岡墓地に夫と合葬され（図17），後妻の墓は黒谷金戒光明寺にある．

12. 福知山藩朽木家の治政

『福知山市史』第三巻には，「寛文七（1667）年朽木稙昌は25歳で，“父稙綱勤労の筋目，若年と雖も向後奏者番たるべし”という恩命を受けて幕府高官のスタート台についたが，若年の上後援者もなくなったためか，寛文九（1669）年6月8日，5千石の加増を合わせて（常陸土浦藩から）3万2千石で丹波福知山へ移封を命ぜられた．移封に際して幕府から貸与支給されたのは加増分高の物成（実収二千石），金にして二千両にすぎないから，当初から莫大な借銀をした．そのうえ入部早々の延宝年間（1673–1681）は，連続する災害（凶作・飢饉・大火・台風・水害など）に見舞われ，たちまち深刻な財政難に陥った．延宝は八年に将軍家綱の死で幕を閉じ，天和と改元された．稙昌は，この年それまでの季綱から稙昌に改名した」と記される[17]．

家綱の弟・綱吉が将軍位を継ぎ，以後宝永五（1708）年まで30年間綱吉の治政となるが，改名してからの稙昌の治世もまた30年（1669–1708）とこれに一致し長いものであった．稙昌は60歳を迎え35年勤続無事故の奏者番を辞任し，綱吉の死去した宝永五（1708）年に67歳で致仕し，正徳四（1714）年72歳で没した．

その後福知山藩朽木家は稙昌の長男稙元（治世；1708–1721）が家督を継ぎ二代藩主となり，三代は稙元の長男稙綱（治世；1721–1726），四代は稙昌の次男で稙元の弟稙治（治世；1726–1728）と続いた．

稙治は30歳で将軍綱吉の中奥小姓に召し出され，16年間も燗の強い綱吉に仕えることができた．これは稙治が学問・文芸・芸能などの教養を

持ち合わせていたからだと思われる．ところが，享保元（1716）年将軍吉宗が就任すると，諸事質素倹約・武事奨励を行い，自らも馬を馳せ，鉄砲を放って鍛錬に励むため，小姓組（親衛隊）も忍耐の限界となった．そのため，植治は老齢・病弱を理由に小姓組番頭の職を早々に辞任し，享保十一（1726）年62歳の時本家を相続して福知山に帰り城主となった．

福知山有馬家二代涼竹はこの頃江戸で六度も火災に遭ったため江戸在住を嫌い，享保十一（1726）年自ら願い出て植治に随従し初めて福知山に移住した．福知山は先祖の墳墓のある三田に近いためであった．

ところが，植治は同十三（1728）年妹の嫁ぎ先の松平兵庫頭松平乗紀（のりただ）の五男乗音（19歳）を養子に迎えて朽木玄綱（とうつな）と改名し，自らは病気の故をもって致仕し翌年玄綱に家督を譲った．植治は僅か2年半の治政であった．翌十四年中風を発し，13年後の寛保元（1741）年77歳で没した[18]．

五代玄綱（治世；1728–1770）は，藩財政再建のため緊縮予算による御手賄（おてまかない）を30年にわたって実施し，藩の財政は小康状態を保った[19]．

六代綱貞（つなさだ）（治世；1770–1780）は玄綱の養嗣子で，安永七（1778）年に京の儒学者巌渓嵩台（いわたにすうだい）を招聘し，その長男の七代鋪綱（のぶつな）（治世；1780–1787）は意を教育に注ぎ，嵩台は福知山藩学校惇明館（じゅんめいかん）の創設に尽力した．当時学僕として有馬涼築宅に寄寓（きぐう）していた新宮涼庭は嵩台に儒学を学んだのである．文化六（1809）年十代綱方（つながた）（治世；1803–1821）の時に惇明館は開校した[20]．

その後も朽木家は十三代の為綱（もりつな）（治世；1867–1871）が明治四（1871）年の廃藩置県で免官となるまで，代々福知山藩主として統治した．

13. 福知山有馬家二代・有馬涼竹 ? –1768（図8）

福知山有馬家の「系図」と「略譜」には，「涼竹は良竹の次男で，初名は斎宮．江戸に数年住み，諸侯召せども敢えて仕えず．たまたま福知山城主朽木植治侯は深く涼竹を信じ，その門弟を請い侍医とした．涼竹は江戸で六度も火災に遭い江戸在住を嫌った．植治侯の城地福知山は涼竹の祖墳三田にも近いため，享保十一（1726）年自ら願い出て福知山に随従し移住した．初め俸四十口を賜

紀州藩「有馬家系図」(左)
「有馬家系譜」(右)
佐伯理一郎著
「有馬涼及ゑ有馬家に就て」より転載

良竹長男　有馬良竹實名不知
故法眼良竹家督相續仕其後朽木土佐守殿醫官相成申ゟ今以
朽木家ニ隨身仕居申ゟ

當有馬涼竹妻　二男　齋宮
丹州福知山城主朽木土佐守植治公、客分ニテ參、此時無引
四十人扶持也、明和五戊子年八月五日　法名　妙池院白蓮
日開居士

「丹波福知山藩典薬有馬家略譜」

四代
涼竹 初名齋宮 ハ良竹の子ニて江都ニ住ス諸侯召せども
敢て仕へず大ニ福知山城主朽木植治侯第四代の主
享保七年六月十日歿 寛保元辛酉年 三四三 深く涼竹を信じその
門弟を請ひて侍醫とせり 涼竹火災ニ遇
つゝ江戸ニ住ス六度ニ及びて江都在住を厭ふ心あり
且つ侯の城地即ち福知山ハ涼竹の祖墳即ち三田ニも
近き故以て自ら願ひ侯ニ從ひて客遊ス享保十
一年 丙戌 ニ下りて福知山ニ來りし初め俸四十口を賜ひ後延享三年 甲子 ニ致仕ス
四十口を賜ひ後延享三年 甲子 ニ致仕ス の時特ニ
二十口を增俸し且つ定地をも賜ひきといふ 明和五年
戊子 八月十五日歿 福知山善行寺ニ葬る

「福知山藩有馬家系図」(巻子本)

有馬涼竹　初名齋宮
應丹波福智山朽木土佐守植治侯徵
列医印明和五戊子年八月五日死葬于
福智山善行寺

有馬涼竹　初名齋宮
涼竹住于江都數年諸侯往々聘之皆
不就焉后朽木土佐守植治侯殊信用
術發齋門生宮后臣醫丹音此時涼竹遇
火災已六度殆懼火災之盛且公之興
以延祖墳之故自請客遊郡于享保十一
年來于福智山賜俸四十口及宅地明和
五戊子年八月五日死葬于善行寺
蓮日開居士葬于當町妙池院白蓮
寺

図8　福知山有馬家二代・有馬涼竹

り，後延享三（1746）年致仕した．この時特に二十口を増俸し，且つ宅地を賜わった．明和五（1768）年八月五日（「略譜」は十五日）死去．福知山善行寺に葬る」と書かれている．

一方紀州藩「有馬家系図」には，涼竹は「丹州福知山城主朽木土佐守稙治公の客分にて参る」とあり，また，紀州藩「有馬家系譜」には，「故法眼良竹家督相続仕り，其の後朽木土佐守殿客礼を以て招かれ候に付，丹波福知山に移住仕り候」とあり，福知山有馬家の系譜と同じく涼竹の代で初めて福知山に移住したことがわかる．法名は妙池院白蓮日開居士である．

14. 福知山有馬家三代・有馬良益 ? –1772（図9）

三代良益は二代涼竹妻の弟で，加賀藩医森順庵の息子が養子となり，延享三（1746）年家督を継ぎ，宝暦十三（1763）年禄二百石を賜り，初めて福知山藩五代藩主朽木玄綱の典薬となり禄二百石を賜った．明和九（1772）年10月16日死す．諡して妙鏡院真浄良益居士と云う．福知山善行寺に葬る．

良益の嫡男四平は，元文元（1736）年11月12日に早世した．そのため養子とした元東が宝暦四（1754）年7月23日に亡くなり，次に養子とした丹後田辺藩高取助内の弟・厚順も明和四（1767）年5月10日に相次いで亡くなった．そのため東都医師松井材庵の弟・昌庵を養子としたが，これものちに離縁した．

厚順の実子に鍋蔵という人がいて，涼築の養子となる．のちに文仲と名を改め，当時蘭学の泰斗大槻玄沢に師事した．涼築は文仲の成長を待ち次代の世継ぎにするつもりであったが，惜しくも寛政二（1790）年10月20日に早世した．諡は玉峯院晴雲居士と云う．福知山善行寺に葬る．

文仲は藩主朽木昌綱にその才を見込まれ，大槻玄沢の最初の弟子となった．文仲は玄沢から聞いた和蘭名物の説四十六条を筆記し，『蘭説弁惑』（別名『磐水夜話』）を著したが，刊行を見ずに寛政二（1790）年若くして世を去った．

15. 福知山有馬家四代・有馬涼築 ? –1812 と五代・丹山 1773–1853（図10）

福知山有馬家の「系図」と「略譜」には，「良益は丹後田辺（舞鶴）藩新宮義珍（道廓）の長男義休（のちに涼築）を養子とし，福知山有馬家四代を後継させた．安永元（1772）年良益致仕後，涼築は禄百七十石を賜り，文化九（1812）年6月8日死．諡して蓮馨院路卿豊山居士と云う．堀邑円浄寺に葬る」と記され，また紀州藩「有馬家系図」（図9）には，「涼築は養壽院山脇道作（東洋）の門人で，厚順の後家を娶り，厚順の実子文仲を養子にした」と記される．

五代丹山は涼築の実子で，初名は脇三郎（紀州藩「有馬家系図」は脇次郎）である．寛政二（1790）年文仲没後涼築の嗣子となり，寛政六（1794）年涼築致仕の後を継ぎ，禄百五十石を賜う．

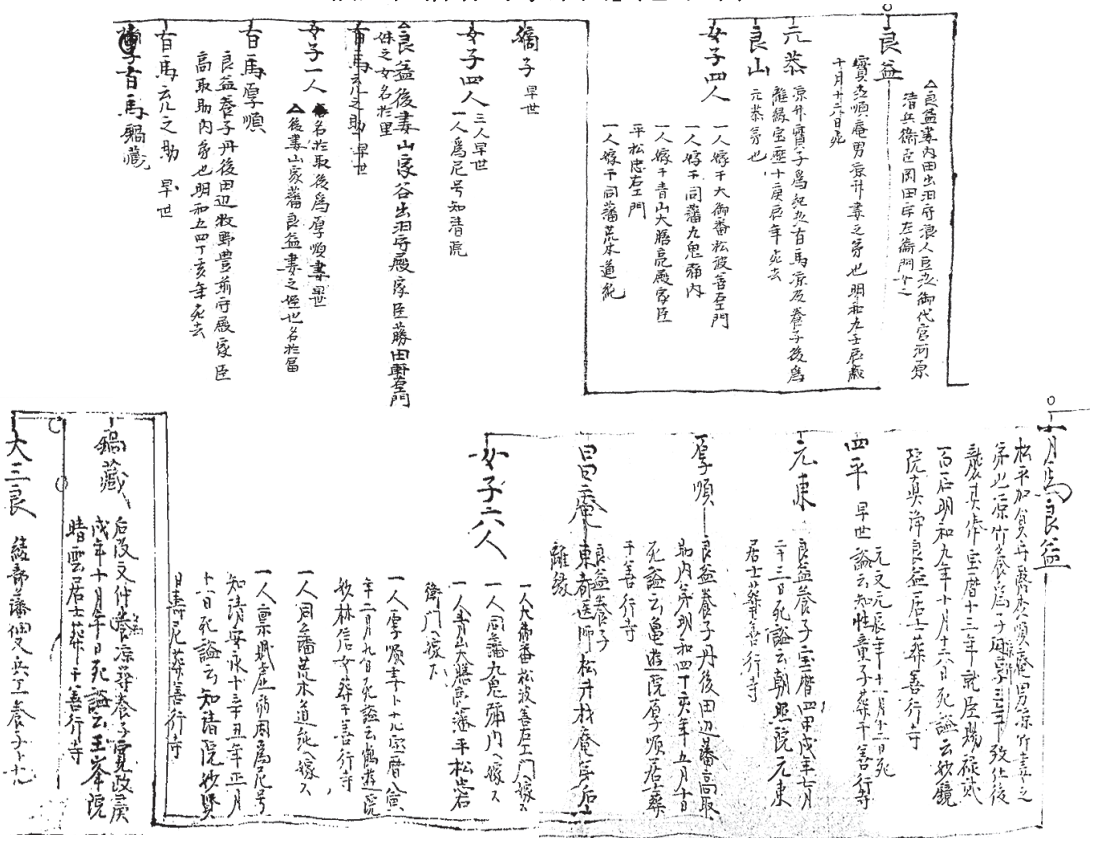
昌綱没後の享和二（1802）年，丹山は勤番のため新宮涼庭を学僕として従え江戸へ出た．翌年文仲の志をついで大槻玄沢の門に入るも，業績らしきものは何一つ遺さず，71歳で隠居し，嘉永六（1853）年8月8日81歳で没した．諡して白翁院丹山日祐居士という．堀邑円浄寺に葬る．

16. 涼築の娘婿・新宮涼庭 1787–1854

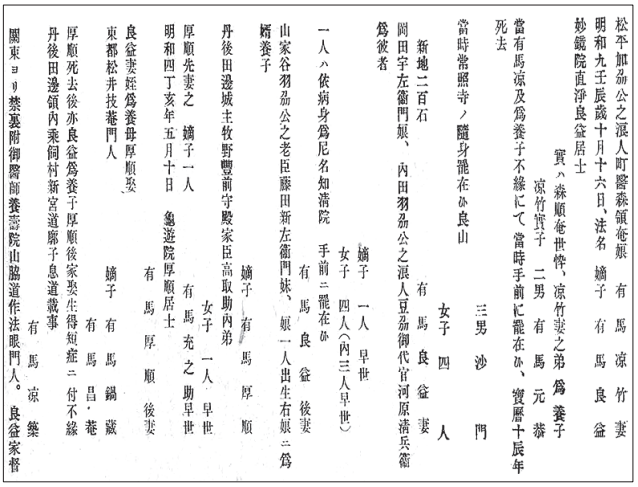
新宮涼庭は，新宮義珍（道廓）の三男・義憲（道庵）の長男で，天明七（1787）年丹後由良に生まれた．父が放蕩で実家が貧困であったため，涼庭は伯父・涼築の学僕となり，寛政九（1797）年11歳から文化元（1804）年18歳までの8年間涼築宅に寄寓して医術を学んだ．その処遇は一介の学僕に過ぎず，家事労働にも追われる中，寸暇を惜しんで勉学に励んだ．この頃ちょうど福知山に巌谷嵩台が定住していたのは幸いであった．

涼庭が12歳のとき巌谷嵩台先生の机前で『左伝』* を読んでいたが，たまたま鼻涕がながれて来たので本の頁を破いて鼻をかんだ．その紙を見つけた崇台は，怒って注意した．しかし，涼庭は覚えてしまえば反故（不要になった紙）と同じであると反論した．先生大いに怒ってそれを確かめ

「福知山藩有馬家系図」（巻子本）



紀州藩「有馬家系図」（巻子本）
佐伯理一郎著「有馬涼及及有馬家に就て」より転載



「丹波福知山藩典薬有馬家略譜」

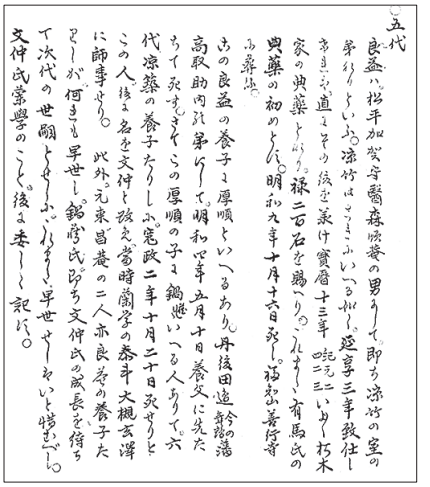
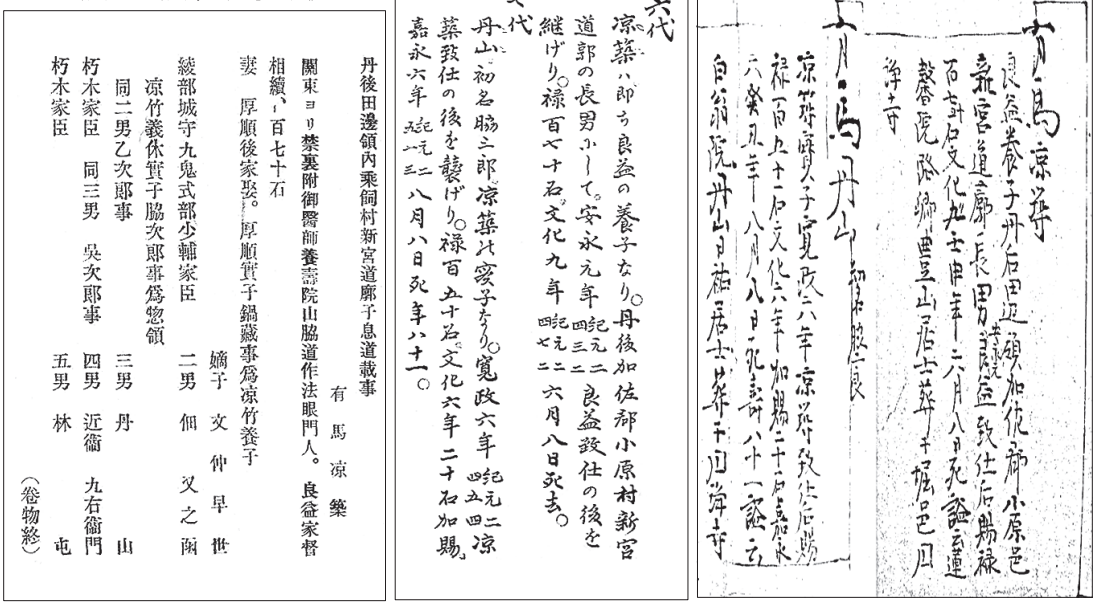


図9　福知山有馬家三代・有馬良益

たところ，一字一句間違わずに諳（そらん）じたという．涼庭は大成したあとも，医書や儒仏の書から名文奇辞を朗読暗記し，年をとってもその勉強法を止めなかった．覚えるまで百回，それでも覚えないときは，さらに千回まで繰り返す心意気を常に持っていたという．

紀州藩「有馬家系図」（巻子本）　「丹波福知山藩典薬有馬家略譜」　「福知山藩有馬家系図」（巻子本）

佐伯理一郎著
「有馬涼及及有馬家に就て」より転載



丹後田邊領内乗飼村新宮道廓子息道載事　有馬涼築
關東ヨリ禁裏附御醫師養壽院山脇道作法眼門人。良益家督
相續、百七十石
妻　厚順後家娶。厚順實子鍋藏事爲涼竹養子
綾部城守九鬼式部少輔家臣　嫡子　文仲　早世
涼竹義休實子脇次郎事爲惣領　二男　佃　又之丞
同二男乙次郎事　三男　丹山
朽木家臣　同三男　吳次郎事　四男　近衛　九右衛門
朽木家臣　五男　林　屯
（巻物終）

○六代
涼築ハ郎ゥ良益の養子なり。丹後加佐郡小原村新宮道郡の長男ふして。安永元年（紀元二千四百三十二）良益致仕の後を継げり。禄百七十石。文化九年（紀元二千六百七十二）六月八日死去。

○七代
丹山。初名脇二郎。涼築ハ家子なり。寛政六年（紀元二千四百五十四）涼築致仕の後を襲げり。禄百五十石。文化六年二十石加賜。嘉永六年（紀元二千八百六）八月八日死。年八十一。

良益養子丹后田辺領加佐郡小原邑新宮道廓長男涼築致仕后賜禄百五十石文化九年壬申年六月八日死。諡新蓮馨院殿卿豊山居士葬于福邑因浄寺

丹山　初名脇二

涼築實子寛政六年涼築致仕后賜禄百五十石文化六年加賜二十石嘉永六癸丑年八月八日死。年八十一。諡玄白翁院丹山日祐居士。葬于因浄寺

図10　福知山有馬家四代・有馬涼築と五代・丹山

（*『左伝』は『春秋左氏伝』のことで，孔子の編纂と伝えられている歴史書『春秋』の代表的な注釈書の1つ.）

深夜灯火がもれて叱責されるのを恐れ線香の火で勉学した．また雨の日には，書巻が濡れるのを恐れ傘骨につるし，傘をさしながら外出歩行の間も読書を怠らなかったという[21]．こうして涼庭は嵩台先生の教鞭によって漢学の基礎を確実にしたのである．

享和二（1802）年16歳の時，涼庭は従兄の福知山有馬家五代丹山の江戸遊学に際し学僕としてこれに従い，その後一年余り江戸で過ごした．この時，丹山は文仲の志を継いで玄沢の芝蘭堂に入門している．

文化元（1804）年涼庭18歳の時，由良村に帰り医業を開業した．そして21歳の頃，丹波檜山（ひやま）の医師近藤一之進宅で，宇田川槐園（玄随）の『西説内科撰要』黄疸篇を読んで発奮し西遊の志を抱いたが，両親に反対され断念した．

文化七（1810）年，ようやく丹後田辺藩の許可を得て長崎遊学の旅に出る．

文化十（1813）年長崎に入り，その後5年間長崎の吉雄権之助（ごんのすけ）（耕牛の息子）の塾で蘭学を学んだ．文政元（1818）年帰郷し，涼庭32歳の時に涼築の娘・春枝を娶り，翌年春京都で開業した．一介の田舎の開業医から始まり，十数年間の苦心研鑽を経て，やがて洛中の名医と称されるようになった．

涼庭はその後妹・千代の娘・鉄女を養女とし，七代丹山に娶（めあわ）せ，さらに六代玄哲の娘・小婦美を養女とし，第一分家の涼閣に娶せた．このように，有馬家と新宮家とは三代にわたり姻戚関係を結んでいる（図11）．

涼庭は，天保十（1819）年3月53歳の時に南禅寺畔に医学校「順正書院」を設立し，その後15年間自らが理想とした医療や系統的な西洋医学教育を多くの弟子達に行った．そして弟子の中でも特に優秀なものを養子とした．なかでも本家を継いだ娘婿の涼民と第一分家の涼閣は，京都療病院（京都府立医大の前身）の設立に貢献している[22]．

ちなみに涼庭は，順正書院設立前年の天保九（1818）年に大阪で蘭学塾適塾を設立した緒方洪庵と並び称される京都医学界の巨頭である．こう

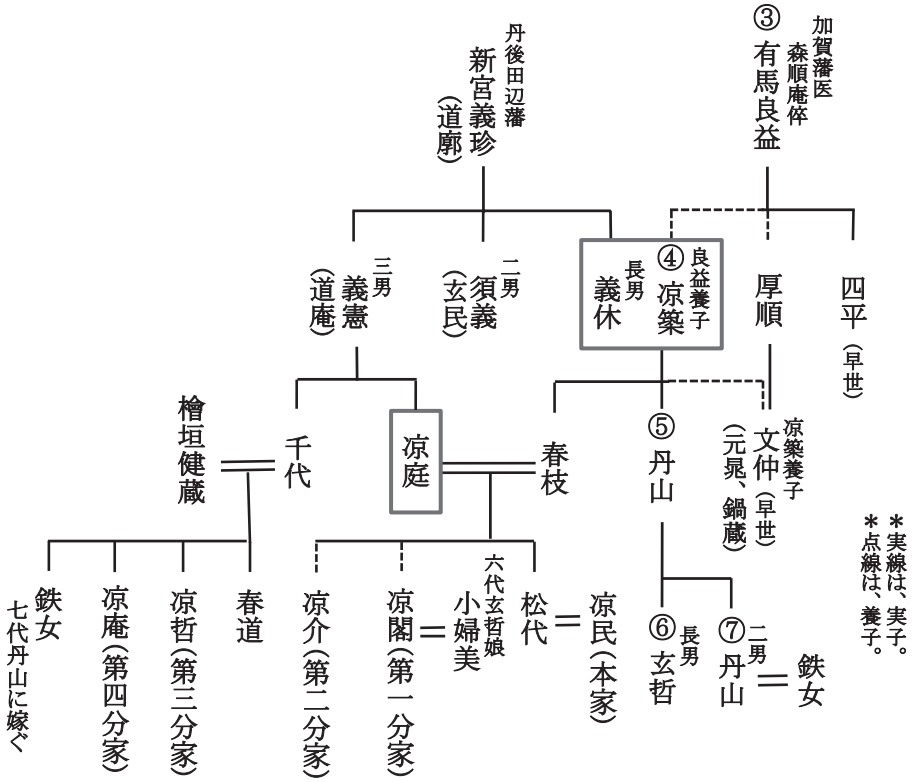


図11　有馬家と新宮家の姻戚関係

して涼庭は優秀な弟子たちに恵まれ幸福な晩年を過ごすことができた．嘉永七（1854）年1月9日68歳の生涯を終え，南禅寺塔頭天授庵に葬られた．法名は順正院新開涼庭居士である．

17. 福知山藩八代藩主・朽木昌綱（まさつな）1750–1802（図12）

福知山藩八代藩主朽木昌綱（治世；1787–1800）は六代綱貞の長男で，寛永三（1750）年江戸桜田藩邸で生まれ，福知山に一度も足を運ぶことなく生涯江戸で過ごした．

昌綱の青少年期は田沼時代で，それまでにない自由な雰囲気があった．武士・町人を含めて知識階級には暮らしよい世の中で，独創的な文化を生み出した．教養のあった六代藩主綱貞の子として天与の才能が十二分に生かされたのも偶然ではない．

昌綱は蘭癖大名と称された一人で，安永元（1772）年23歳頃から前野良沢の門に入り蘭学を学び，『解体新書』の翻訳にも加わった．安永八（1779）年30歳頃から江戸本材木町の大槻玄沢の家塾芝蘭堂に出入りし，この年と天明元（1781）年に江戸参府したオランダ商館長ティチングと交わり，西洋文化を盛んに取り入れた．天明五（1785）年には大槻玄沢の長崎留学を支援し，その後藩医の有馬文仲（元晁（げんちょう），鍋蔵，涼築の養子）を玄沢の最初の弟子として送り込んだ．天明七（1787）年昌綱28歳の時に，七代藩主舗綱（のぶつな）が死去し家督を継いだ．

文仲は『蘭説弁惑』（別名『磐水夜話』）を著した[23]．『蘭説弁惑』は，磐水（玄沢）がある夜に元晁等門人たちの疑問に答えたのを筆記した書である．附言には「その渡来の薬品器物の数数言あやまり，聞あやまりたる惑ひを，あらあら弁じ給ふたるにこそ」とあるように，蘭学の普及にしたがって生じた誤りを正す内容が記され，「硝子諸器」「葡萄酒」「写真鏡」など，さまざまな西洋の文物を挿絵付きで解説している．

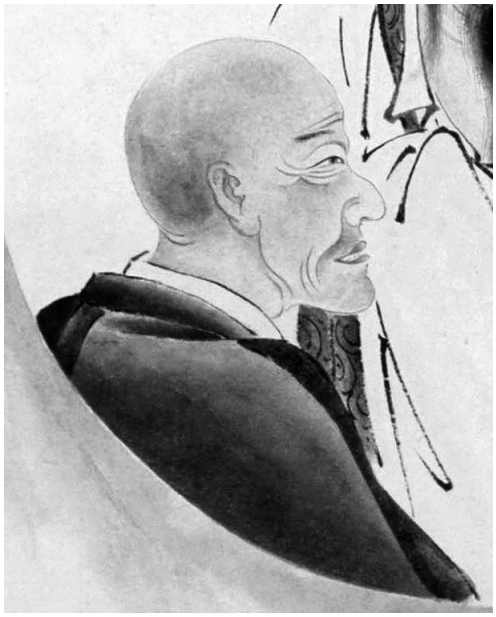


図12　朽木昌綱肖像画
東京大学史料編纂所 所蔵

また，昌綱は玄沢の『蘭学階梯』に序文を寄せ，さらに『西洋銭譜』や『泰西輿地図説』（別名『泰西図説』）を著した．

芳賀徹氏は，“寛政七（1795）年以降，毎年西暦の元旦に大槻玄沢の家塾「芝蘭堂」で新元会（オランダ正月）が祝われ，1799年の五回目の会の時「蘭学者相撲見立番附」（図13）が作られた．これは当時の蘭学者80名を東西の大関・関脇から前頭二十九枚目までにランク付けした大変面白いものである．その中央に「蒙御餘澤」と書かれ，「年寄・前野良沢，杉田玄白」「勧進元・大槻玄沢，同差添・桂川甫周」という蘭学界の大御所の名とともに，「立行司・福知山侯」の名が挙げられているが，これこそ，ほかならぬ朽木昌綱のことである．”と解説している[24]．

昌綱は1800年に50歳で隠居したが，この番付はその前年に作られたものである．しかし，蘭癖大名として有名な薩摩藩藩主・島津重豪（1745–1833）はこの番付に載っておらず，また，重豪次男の中津藩主・奥平昌高（1781–1855）は，19歳の青年だったにもかかわらず，西前頭二十二枚目にその名が載っている．

このことからも，昌綱がこれまでに築きあげた学問的実績やその間に自ずと備わった人望と威厳ならびに貫禄が，立行司を務めるに相応しかったと思われる．

また，『福知山市史』第三巻には，「『蘭学階梯』（大槻玄沢著）に寄せた昌綱の序文によって，私達は昌綱の学問や思想に関する見解を知り，その軒昂たる意気込みに触れることができる．その序文は“支那は世界の一片に僻在しているにも拘わらず，自ら中国と称しているのは，甚だ不遜と言うべきである．それはまずよいとしても，上代の日本人は現在の人々のように，中国を唯一無二の存在と思い込むようなことはなく，諸外国に対して華夷*を論ぜず，その美を求め，その長を採り，民族の豊かな文化を育ててきたのである．故に私は現代の人々の蒙を啓かんがために地理学に志し，世界における日本の位置を明らかにしようと考えた．その際ヒマラヤ・崑崙の彼方を知らぬ視野狭小な支那人の地理書はもはや役に立たない．そこで世界を股にかけて歩くオランダ人に学ぼうと，前野蘭化先生について玄沢等と勉強を始めたところ，果して彼の国の学問は広く豊かで，とうてい一朝一夕に究めつくせるものではない．幸い今度玄沢が『蘭学階梯』を編集した．世人よ!!これによって学び我等が後に続け”というものである」と書かれている[25]．

（*華夷とは，〔「華」は中国，「夷」はえびす〕中国から見て，自国と外国のこと．）

昌綱は13歳のころ，当時大流行した古銭の蒐集に興味を持ち，天明元（1781）年32歳の時に『新撰銭譜』を著した．約20年間のたゆまぬ蒐集と研究の集大成といわれている．さらに，天明七（1787）年『西洋銭譜』を刊行し，この年の11月に福知山藩主に就任した．

この書は，ドイツやオランダなど西洋諸国の貨幣図録で，古銭蒐集家であった昌綱自身が描いた金銀銅貨の表裏の図のほか，貨幣の大きさや重さ，さらに西洋の国々の事情を解説したものである．この古銭の研究がやがて歴史・地理の研究に繋がり，ついには西洋の文化の探求にまで及ぶことになったのである[26]．

図13 「蘭学者相撲見立番付」
『芸海余波』早稲田大学図書館 所蔵

その後，昌綱40歳の寛政元（1789）年に『ゼオガラヒー』を抄訳し『泰西輿地図説』（図14）を刊行した．当時学者の間で『ゼオガラヒー』（オランダ語で地理学）と呼ばれていたのは，ドイツ人ヨハン・ヒュブネル（Johann Hübner）の『古今地理学問答』（1693年刊）のオランダ語翻訳本のことで，この書の巻一はヨーロッパ総論，巻二～十四は各国地誌，巻十五～十七は地図，都市図，諸図からなり，学術的な西洋地誌の権威書として長く珍重された．江戸時代に出版された最初のヨーロッパ地誌で，世界地図やパリ，ロンドン，ユトレヒトの都市図を紹介している[27]．

昌綱は，寛政十二（1800）年51歳で九代倫綱（ともつな）に家督を譲り，隠居剃髪して近江入道と号して箱崎中屋敷（現在の中央区日本橋箱崎町）に入り，寛政十四（1802）年江戸で没した．享年五十三[28]．

18. 福知山有馬家
六代・玄哲，七代・丹山，八代・龍仙，九代・康三郎，十代・良三（図15）

福知山有馬家「略譜」には，「玄哲は丹山の実子．天保十五（1844）年丹山致仕の後を継ぐ．玄

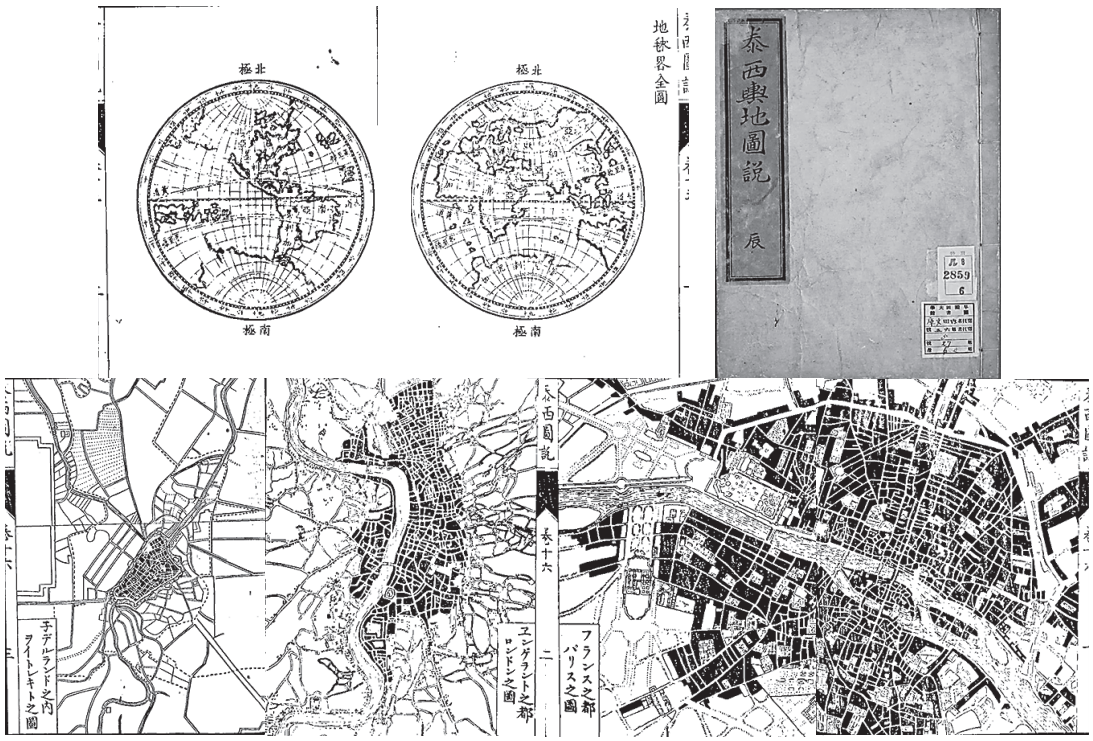


図14　『泰西輿地図説』朽木昌綱著，天明七（1787）年刊
早稲田大学図書館 所蔵

哲身体虚弱なりければ業を弟文哲に譲りて致仕す．明治十（1877）年十月十七日死去」．また，「系図」には「壽七十六年謚して見性院玄誠日諦居士と云う．円浄寺に葬る」とある．

「略譜」には，「丹山は玄哲の弟にして，初の名を文哲．後に丹山に名を改む．安政五（1858）年前代致仕の後を継ぐ．明治十四（1881）年二月廿七日死去．年六十二」「龍仙翁は（七代）丹山の養子にして和歌山藩浅井弥六右衛門の第二子なり．嘉永六（1853）年十二月廿五日入籍．弘化元（1844）年正月十五日生」と書かれ，「康三郎は龍仙の養子にして篠山藩藩士中川収斎の弟なり．慶応元（1865）年正月六日生れ．明治廿二（1889）年五月三日入籍．その学歴等左の如し．大阪医科大学の前身大阪医専卒業」「良三．康三郎長男にして歯科医師」と書かれる．

19. 玄哲と紀州有馬家の墓（図16）

京都黒谷にある浄土宗の大本山である紫雲山金戒光明寺には，医家有馬家始祖の玄哲と紀州有馬家初代涼及，二代恭安の墓がある．その他には玄哲妻の墓「浄誉清順信女墓」と，「有馬涼竹後妻藤堂氏之女」と刻まれる福知山有馬家初代良竹後妻の墓がある．

玄哲の墓の左側面には，「諱玄哲素同，姓有馬氏，号瑞庵，以天正九年辛巳生于摂之有馬郡，壮年来于洛陽，学医於延寿院東井翁，其名顕于当世，歴位至法印，以寛文五年乙巳七月二十五日終于桃花坊之宅，寿八十五，及終遺言改号万空，同二十七日葬于洛東黒谷」と墓碑に刻まれている[29]．

玄哲の次男涼及の墓の左側面には，「若名涼及，守史関，源姓有馬氏，存庵臥雲皆其号也，寛永十年癸酉四月二十四日生京師，元禄十四年辛巳十二月初七日終于摂州大坂，寿六十九，帰葬于洛東紫雲山先塋之次．孝子篤（恭安）謹建」と刻まれ[30]，涼及は娘の嫁ぎ先の大坂で亡くなっている．

また，信多純一氏の論文「有馬涼及法眼伝」によると，涼及の妻は「妻女者越前白石氏女　正徳

「丹波福知山藩典薬有馬家略譜」　「福知山藩有馬家系図」（巻子本）

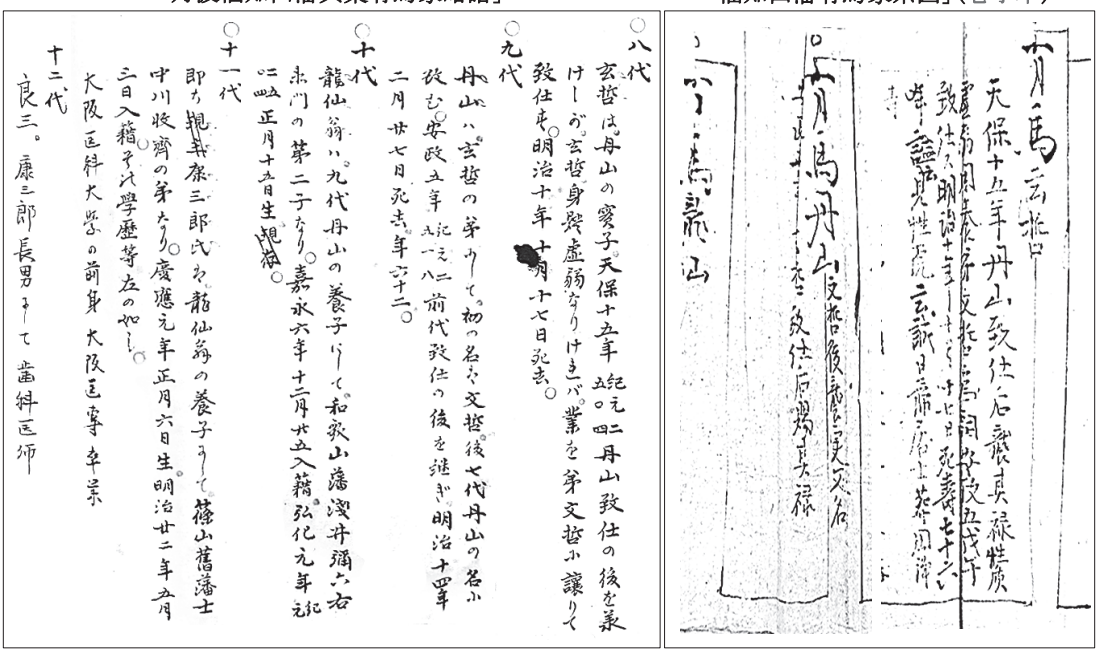


図15　福知山有馬家六代・玄哲，七代・丹山，八代・龍仙，九代・康三郎，十代・良三

二代恭安の墓　初代涼及の墓　始祖玄哲の墓

図16　金戒光明寺にある玄哲と紀州有馬家の墓

五乙未（1715）年八月十七日寿六十五歳而逝諡延明院無因尼葬于正（将）法院」と記され，墓は黒谷にあるはずであるが，未だに墓碑の所在は不明である[31]．

さらに，涼及の長男恭安の墓の裏面には，「法橋諱篤，字恭安，号何動，姓有馬氏，世業医，祖法印玄哲，考法眼涼及，皆為時之名医，妣某氏，寛文五年乙巳十月十二日生南都，娶北原氏之女，

子男二人皆夭，女三人其二亦夭，養弟宗函為嗣，宝永二年乙酉五月十七日，卒于洛陽，享年四十一，葬于紫雲山先塋之次．宗函謹立」と，恭安の養子で凉及の4男宗函（凉及元函）による碑文が刻まれている[32]．

良竹後妻の墓碑には「有馬凉竹後妻藤堂氏之女」と刻まれ，藤堂泉州公幕下藤堂宮内（伊賀名張を領し，知行二万石，藤堂阿長）の娘のことである．寛永十八（1641）年四月八日生れ．寛文七（1667）年七月四日二十七歳で没[33]．

20. 福知山有馬家の墓所（1）善行寺（図17）

福知山有馬家の墓は，福知山市天田北岡の日蓮宗・善行寺北岡墓地にある．初代良竹は元禄十六（1703）年4月6日に江戸で亡くなり，麻布（光明山）深廣寺に葬られたが，のちに善行寺に改葬されたと考えられる（図18）．

良竹夫妻の墓は，前面に初代良竹「前法眼有馬凉築先生」と，良竹の先妻「孺人姉小路亜槐*息女」の名が刻まれ，その中央に「龍壽院前法印有馬玄哲先生之墓」と父親玄哲の法名が刻まれている．（*亜槐は，大納言の唐名．）

この墓の左側面（図18）に刻まれる「元禄十六癸未年四月六日」は初代良竹の没年月日で，「寶永二乙酉（1705）年九月六日」は，良竹の後妻が寛文七（1667）年に亡くなっていることからしても，先妻の没年月日ではない．良竹と先妻が改葬された日ではないかと思われる．ちなみに後妻の墓は前述した通り黒谷にある．玄哲は黒谷金戒光明寺に葬られ墓もあるため，ここには玄哲の法名が刻まれているだけである．

「六世有馬丹山先生之墓」と刻まれるのは七代丹山の墓で，その隣には妻の「新宮鉄女之墓」（図18）がある．鉄女は新宮凉庭の妹千代の子である．

福知山有馬家八代「有馬龍仙之墓」の右側面には「康三郎之建」と刻まれ，その向かいには昭和十四年に建立された九代康三郎の墓がある．その左側面には，「青々と有馬の山の若松は　後の世までも枯れじとぞ思ふ」と，紀州有馬家八代の有馬良橘の和歌が刻まれる[34]（図18）．これは福知山有馬家と紀州有馬家とは明治以降も交流が続い

図17　福知山有馬家の墓所（1）善行寺　福知山市天田北岡

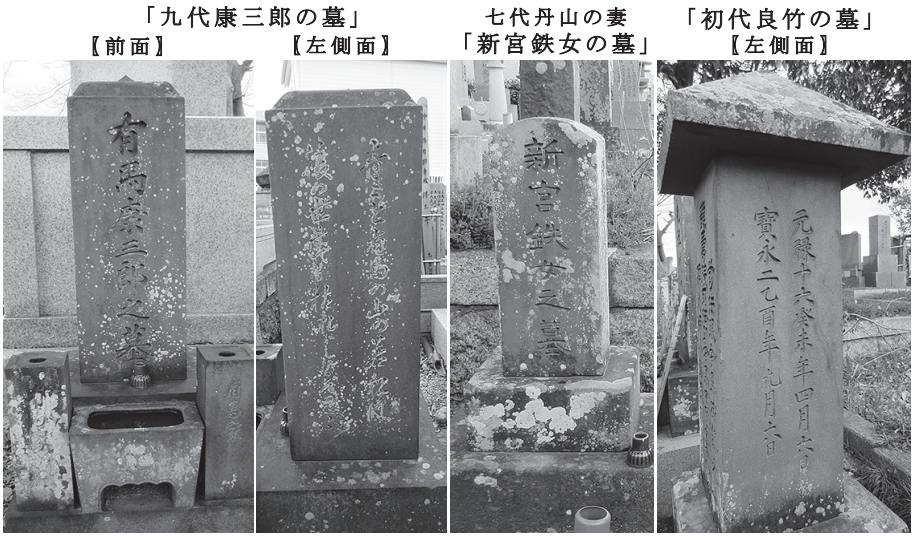


図18　善行寺にあるその他の有馬家の墓

図19　福知山有馬家の墓所（2）円浄寺　福知山市堀

ていたことを物語っている．

良橘は紀州有馬家七代元函廣徳の長男で，日露戦争では連合艦隊参謀として旅順港閉塞作戦を立案指揮した．その後明治神宮宮司，主枢密顧問官に任ぜられ，勇名をはせた．特に明治天皇と東郷平八郎との関わりが深く，東郷の側近中の側近として，東郷が昭和九（1934）年に亡くなった際は葬儀委員長を務めた有徳の人である．

福知山有馬家の系譜によると，二代涼竹と三代良益ならびに文仲の墓も福知山善行寺にあるはずであるが，見つからなかった．

21. 福知山有馬家の墓所（2）円浄寺（図19）

福知山市堀にある曹洞宗の円浄寺には，四代涼築と五代丹山，六代玄哲の墓がある．

前方の「有馬丹山先生之墓」の墓碑右側面には，「法諱云白翁院丹山日祐居士　有馬玄哲樹之」と刻まれ，五代丹山の墓である．

中央の「龍壽先生之墓」の墓碑右側面には，「法諱曰蓮馨院路卿豊山居士　有馬丹山樹之」と刻まれ，四代涼築の墓である．

また，「歸一先生之墓」の墓碑右側面には，「君諱亘一字玄哲号歸一娶朽木氏之女有一女曰里嫁荒木于泰庵養弟玄哲為嗣明治十年十一月十七日棄世壽七十六諱曰見性院玄誠日諦居士　有馬典義樹之」と刻まれ，六代玄哲の墓であった．

22. おわりに

福知山有馬家は玄哲の孫・涼竹から龍仙まで，江戸中・後期から維新までの120年余り典薬として藩主朽木侯に仕えた．その後明治期以降三代にわたり歯科医院を開業し，現在十二代の良宏氏は歯科医として活躍されている．

有馬家は曲直瀬玄朔門下で名医の誉れ高い玄哲を医家の始祖とし，酔狂な奇行で世間の耳目を集め，古方派の嚆矢とみなされる英傑の医家・涼及をはじめ，その子孫には秀逸な医師や有徳の人を数多く輩出した名家であった．

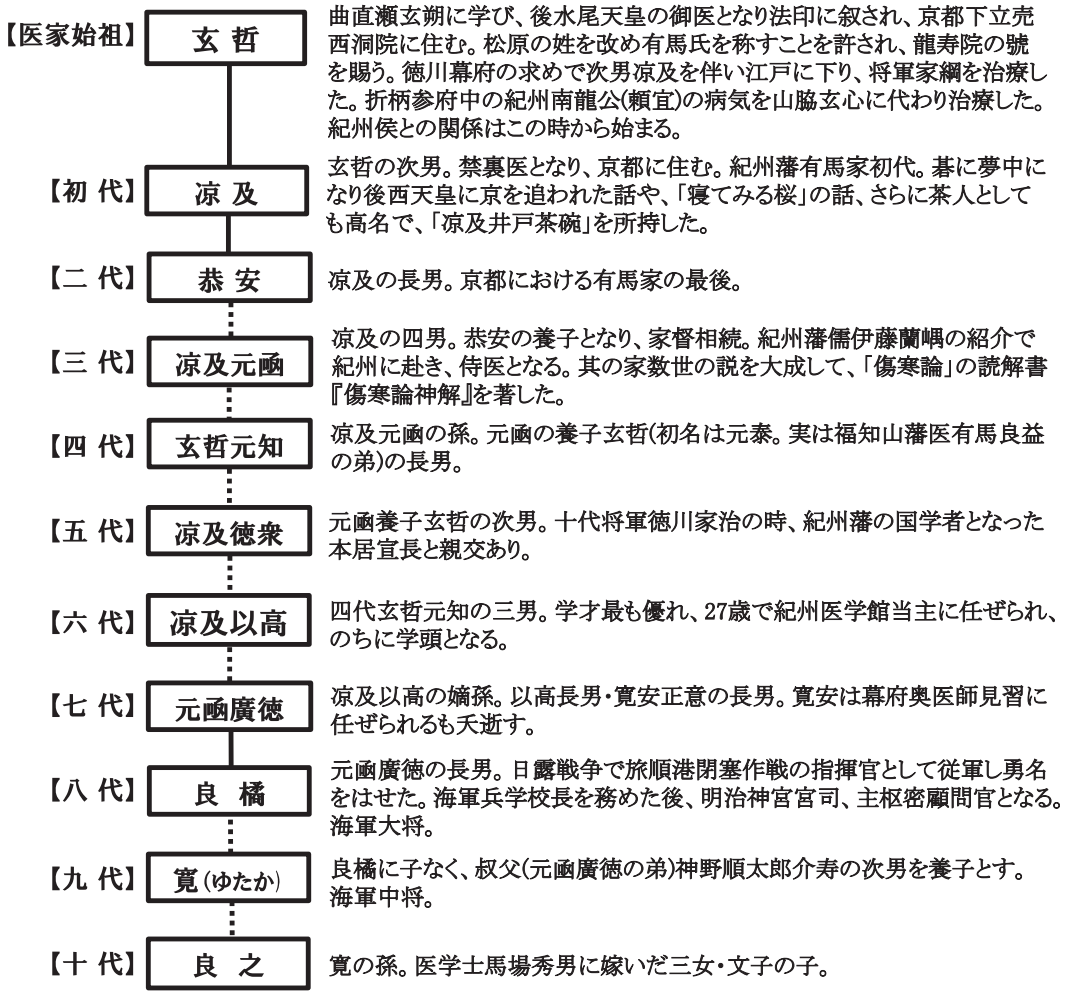


図20　紀州有馬家の系図（── 実子　- - - 養子）

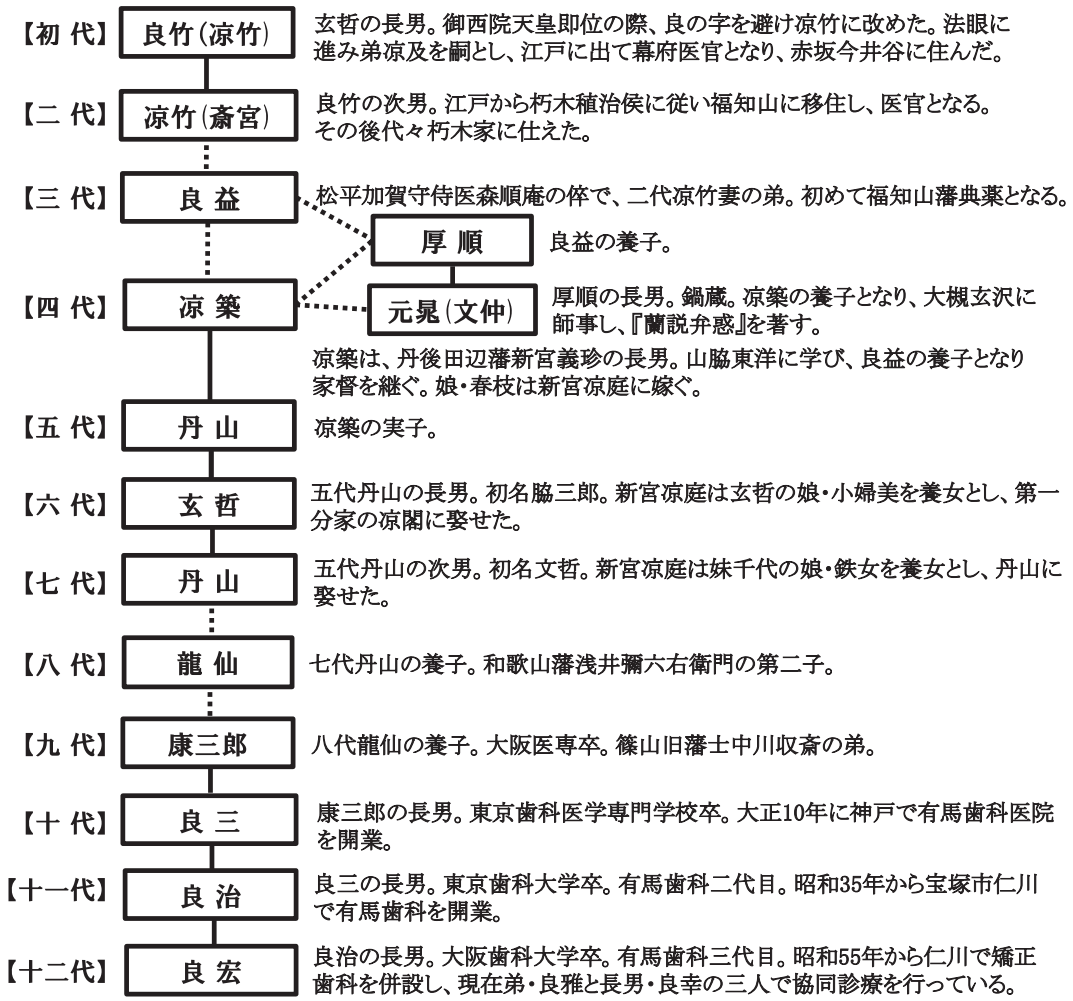


図 21　福知山有馬家の系図（── 実子　- - - 養子）

最後に，医家有馬家の系譜をまとめた「紀州有馬家の系図」（図 20）と「福知山有馬家の系図」（図 21）を供覧する．また，稿を終えるにあたり福知山有馬家の貴重な史料の閲覧を許可していただいた有馬良宏氏，竹毛氏の出自をご教示いただいた福知山市立図書館中央館の谷垣啓子氏，朽木昌綱著『泰西輿地図説』と「蘭学者相撲見立番付」の掲載を許可していただいた早稲田大学図書館特別資料室，ならびに合田求吾の書『医道聞書』の掲載を許可していただいた鎌田共済会郷土博物館の吉久由紀子氏に深謝申し上げる．

附　記

本稿は，2018 年 6 月に鹿児島市で開催された第 119 回日本医史学会学術大会で発表した内容を修正し加筆したものである．

参考文献ならびに注釈

1）佐伯理一郎．有馬涼及及有馬家に就て．日本医史学雑誌．1942；1307：p. 357–371
2）佐藤栄祐編．有馬良橘傳．東京：有馬良橘伝編纂会；1945．附録　系譜：p. 5–16
3）白嵜顕成．くろ谷金戒光明寺に眠る人びと．京都：くろ谷金戒光明寺執事長　芳井秀教；2013：p. 436–446
4）白嵜顕成．藤村庸軒をめぐる人々．京都：思文閣出版．2011；p. 679–683
5）松井拳堂．丹波人物志　復刻版．京都：臨川書店，1987；p. 383
『丹波人物志』によると，山口加米之助（1863–1945）

は福知山市笹尾に生れ，明治十八（1885）年に小学校教員となり，天田郡，京都市に勤めた．その後福知山中学に明治三十四（1901）年の創立から大正十五（1926）年まで26年間勤めた．大正十三（1924）年淑徳高等女学校（現在の福知山淑徳高等学校）を創設して郷土の教育に尽し，傍ら郷土古文書の散逸を憂い郷土史料を編み，大正初年から「福知山城史」，「天田郡志資料」（昭和十一年刊）などを執筆した．

6）原田正俊．朝日日本歴史人物事典．東京：朝日新聞出版；1994：p. 171–172

伊藤蘭嵎は，伊藤仁斎の末子（五男）で，名は長堅（ながかた）．12歳で父と死別し，長兄の東涯に育てられた．享保十六（1731）年紀州藩儒となり和歌山に移住した．元文元（1736）年東涯没後は，10年間東涯の嗣子東所を教育しその家計を援助し，古義堂の経営に当たった．仁斎の子の中でも，東涯と蘭嵎が特に学才に優れていた．

7）単行本3）：p. 437

8）浅田宗伯．皇国名医傳　巻之上　山脇養壽院．東京；1852：p. 9–10

9）文献1）：p. 362

10）寺田貞次．京都名家墳墓録．東京．村田書店；1976：p. 474

11）単行本6）朝日日本歴史人物事典：p. 1515

鳳林承章（1593–1668）は，江戸前期の臨済宗の僧で，寛永文化の担い手のひとりとして知られる．公家の勧修寺晴豊の子として生まれ，7歳で豊臣秀吉，徳川家康の政治顧問として有名な西笑承兌（さいしょうじょうたい）の弟子となってそのあとを嗣ぎ，鹿苑寺（金閣寺）の住職，さらに相国寺の第95世となる．後水尾上皇のもとでの宮廷サロンの一員として活躍しており，鹿苑寺には五山僧，公家のみならず，茶人，陶工，医師などさまざまな人々が集まった．寛永十二（1635）年より34年間にわたる日記『隔蓂記』は，この時期の京都を中心とした政治，文化をみるうえでの基本史料となっている

12）単行本3）：p. 438–441

13）伊藤東涯．古学先生文集　巻の首　先府君古學先生行状．京都．玉樹堂；1717：p. 1754

14）今井　秀．近世の医療史―京洛・大坂ゆかりの名医．京都．宮帯出版社；2015；p. 212

15）松岡尚則他．並河天民の師―有馬涼及について．日東医誌　Kampo Med Vol.63 No6; 2012: p. 424–425

16）文献1）：p. 367

17）福知山市史編さん委員会．福知山市史　第三巻．福知山；1984：p. 60–66

18）同上：p. 72–78

19）同上：p. 78–96

20）福知山市史　第三巻：p. 104–107

巌渓嵩台（生没年不詳）は京都の儒学者で，名が恭（きょう），通称は帯刀．吉益東洞に医術を学び，宝暦十三（1763）年に刊行された東洞の「建殊録」を編集した．

21）山本四郎．新宮涼庭傳．京都．ミネルヴァ書房；1968：p. 18–21

22）単行本14）：p. 459–461

23）単行本17）：p. 116–124

24）芳賀　徹．物語藩史　第五巻　福知山藩．児玉幸多，北島正元編．東京．人物往来社；1965：p. 333–337

25）同上：p. 343–346

26）単行本17）：p. 119–120

27）同上：p. 120–123

28）同上：p. 124

29）単行本10）：p. 474

30）同上：p. 474

31）単行本3）：p. 445

32）単行本10）：p. 474

33）単行本3）：p. 446

34）杉立義一．京の医史跡探訪〈増補版〉．京都．思文閣出版；1991：p. 334

Genealogy of the Arima Family of Doctors: The Originator Was Gentetsu Arima

Shu IMAI

Imai Orthopedic Surgery

The Arima family of doctors continued to the end of the Edo period and they served the feudal lords of the Tanba Fukuchiyama Domain and the Kishu Wakayama Domain. Gentetsu Arima was the originator of the Arima family of doctors. He learned medicine from Gensaku Manase, who was later appointed as a Hoin, and served the Emperor Gomizuno. Because of this, he was called a hero.

His eldest son Ryotiku took over the Arima family and gave the headship to his younger brother Ryokyu. Later, Ryokyu served Yorinobu Tokugawa (called Nanryu). A descendant of Ryotiku served the Fukuchiyama Kutsuki feudal lord, and a descendant of Ryokyu also served the Kishu Tokugawa feudal lord.

Especially, Ryokyu behaved as he pleased, but he is regarded as the founder of Japanese Kohou medical group and he became a one of the famous doctors in Japan.

On the other side, Ryotiku Arima and his adopted son Buntyu also became famous doctors. Buntyu Arima learned from Gentaku Otsuki, and he wrote “Ransetu Benwaku” which explained the products of Western civilization.

In conclusion, the Arima family is one of the famous families of doctors in Japan.

Key words: Gentetsu Arima, Ryokyu Arima, Fukuchiyama Kutsuki’s family, Kishu Tokugawa’s family